

並行読書を活用した「ウナギのなぞを追って」(四年下)



並行読書とは

今回は、並行読書を取り入れた授業の教材研究について考えてみましょう。教材は、四年下巻の説明的文章、「ウナギのなぞを追って」です。本論に入る前に並行読書とは何か、その目的について少し触れたいと思います。

並行読書とは、国語科の授業と並行して、その教材の内容や単元のねらいに即した図書を目的に読む活動を指します。今、国語科の授業と日常の言語生活の意図的なコラボレーションとして注目されています。

では、なぜ、このようなコラボレーションが必要なのでしょう。言語力の向上に、学校教育における国語科の指導が大切なのもちろんです。しかし、その一方で、子どもたちを取り巻く言語環境の影響を見逃すわけにはいきません。

私たちは言語に囲まれて生活し、言語

単元の位置づけを確認

それでは、いつものように教材研究をしていきましょう。文章は、大きく三つのまとまりに分かれています。「初め・中・終わり」の構成といえます。タイトルは、刺激的です。なにしろ「謎解き」なので、子どもたちの興味をいやがうえにもかき立てます。

単元名は「科学読み物をしようかい

の中で呼吸しています。この環境を意図的に言語教育に生かすことができれば、授業で獲得した基礎的な国語力の活用場面は限りなく広がります。日常の言語活用体験は、確かな国語力として子どもたちの内面に定着し、他教科等での言語活動に無意識に引き出され、それにより、それぞれの言語活動が充実します。そして、そのことが教科等の目標達成に生かされ、真の学力向上につながっていくのです。

並行読書が、一般にいう自由読書と異なるところは、「目的」という点にあります。学習指導要領の「読むこと」の内容には、「目的に応じた読書に関する指導事項」(カ)が掲げられています。どの発達段階でも、目的的な読みが求められているのだといえます。



※1「ウナギのなぞを追って」冒頭ページ(P74)

しよう」(※1)。教科書で想定されている身につけさせたい力は、「事実と考えるの記述に気をつけて調査の道筋を読むこと」「興味をもったところを中心に、文章を要約すること」です。

さて、ここで忘れてはならないのは、本単元に位置づけられた言語活動が「科学読み物を紹介する」であることです。単に、ウナギの謎について理解する、教材文を正確に読み取ることです。完了すると

単元との出会い

「科学読み物を紹介しよう」

関心のある科学読み物を探して読み、それを互いに紹介し合う活動をしよう。

第一次

○自分たちの周りを取り巻く多くの不思議な謎の存在に気づき、関心をもつ。
・題名読み
・ブックトーク(教師による本の紹介)
・興味をもったことを中心に要点を整理して紹介の文章を書く方法を学ぶ

第二次①

○謎の解明に取り組む人々が活躍し、成果を出していることを知るとともに、興味のある本を選ぶ。

第二次②

○教材文を使って、紹介の文章を書く。
・教材文「ウナギのなぞを追って」を読み、内容を理解する
・教材文の読みと並行して、自分の選んだ本を読み進める
○調査・研究の結果を分かりやすくまとめた教材文の記述から、表現の特徴やまとめ方の工夫(根拠の示し方や構成、図・写真の取り入れ方など)をつかむ。

第三次

○「ウナギのなぞを追って」の紹介の文章を参考にして、自分が読み進めてきた本を紹介する文章を書く。
○それを互いに紹介し合って、不思議な世界の謎解きを楽しむ。

※2指導計画例

いうわけではないのです。教材文を読んで獲得した力を、自分の目的に応じて活用する力(類似した読み物を読む力)を育成することが求められているのです。学習指導要領「読むこと」(第三学年及び第四学年)には言語活動例として、イ 記録や報告の文章、図鑑や事典などを読んで利用すること。

ウ 記録や報告の文章を読んでまとめたものを読み合うこと。

エ 紹介したい本を取り上げて説明すること。

が示されています。こうした活動を通して、指導事項、身につけさせたい能力を育成するわけです。つまり、本単元は「私の選んだこの科学読み物を、友達や先生に紹介するのだ」という子ども視点の活動目標(ゴールイメージ)をもたせ、「そのために、教材文でしっかり力をつけるのだ」という主体的な学びを引き出すつくりになっているといえます。それを踏まえて考えたのが、指導計画例(※2)です。

教師による本の紹介 ―ブックトーク―

子どもたちは、本単元を学習するまでにいくつかの説明的な文章を読んだ経験があります。そうはいっても、単元の導入段階で、科学読み物とはどんな文種のものか、具体的にはどのような本があるのかを示すことは、子どもたちの意欲を高めるために効果的です。そこで行いたいのが、本の紹介、つまりブックトークです。

教科書P84の「本は友達」(※3)には、「本を読み、筆者とともに生き物のなぞにせまみましょう」として、五冊の科学読み物が紹介されています。これらを取り上げるのもよいでしょう。こうした本は、できれば複数冊用意して子どもたちの興味・関心に十分応えたいものです。そのためには、本の計画的な購入や地域図書館との連携、学校図書館の司書や図書館ボランティアに協力を求めることが有効です。教科書P122～125の「この本、読もう」も大いに参考になるでしょう。教師によるブックトークの場合、紹介

する本は、内容だけでなく、構成や記述のしかたについても、単元の目標に沿ったものであるほうが、学習効果が上がります。意図的に選書することによって、ブックトークをより効果的な時間にしたいものです。

そのためには、教師が日頃からさまざまな文種の本を読んでおくことが大切です。自分の興味や関心を意識的に広げることです。また、子どもたち自身に本と



※3「本は友達」(P84)

出会う喜びや、本を探したり選んだりする楽しさを味わわせるには、学校図書館の活用が有効でしょう。ともかく、教師自身が学校図書館の蔵書に興味をもち、普段から足を運ぶことを勧めます。指導目的や児童の実態、学校・地域の状況に応じた読書の扱いを工夫してみましょう。ブックトークを行う時期は、

- ・本文の学習に入る前
 - ・本文の学習の途中
 - ・本文の学習を終えてから
- などいくつか考えられますが、単元の指導計画に応じて、最も効果的な時期を選ぶようにします。今回の指導計画例では、単元の言語活動に合わせて、早い段階から並行読書始める構成としました。
- いずれの段階から始めるにしても、関連する本を子どもたちの手が届くところに常備するなど、言語環境・図書環境は普段から意識して整えておくようにしましょう。地域図書館や家庭に呼びかけるなどの手立てでも有効です。

教材文の学習にあたって

この授業では、教材文を使って、「自分が読んだ科学読み物の内容や自分が受けた感動を、相手に分かりやすく伝える表現方法(事実と感想・意見を明確に区別して伝える、要点に注意して読み、必要な部分は要約・引用して伝える、紹介の文章)」について理解させます。そして、それらを活用して、今度は自分が選んだ本を紹介する文章を書かせます。

第二次、教材文から学ぶ段階では、
・どのようなことに着目して読めばよい
か。

・どんな項目や視点でまとめれば相手に
分かりやすく、興味・関心をそそる
紹介の文章になるか。

について、子どもたち一人一人に、自
分の目的意識をもたせたいので、文章
に向き合わせましょう。

時間の確保

並行読書の時間設定についてはいろい
ろな実践報告があります。

学校や学年で「朝読書」の時間が定着している場合は、その時間を使います。あるいは、全て課外で進める方法もあります。家庭での読書です。その場合も、どんな本を選んでいるのか、一人一人の選んだ本を教師が把握しておく必要があります。選書に迷う子や目的とかけ離れた選書をした子には、本の候補を具体的に挙げるなどの指導が必要です。さらに、ときどき進捗状況を確認し、励ますなどしたいものです。

初めて並行読書を経験させる場合には、単元の指導時間の中に組み込み、適宜、指導しながら進めることも有効です。毎時間の授業の始まりや終わりに読書タイムを盛り込む方法です。いずれにしても、キーワードは**目的的に読む**ことです。

自分が選んだ本を並行読書しながら、「ウナギのなぞを追って」を学習すること、子どもたちは次のようにさまざまに感想をもつことでしょう。

「図・絵・写真・地図・表などがたくさん使われている。私の選んだ本でもそうだった」

「研究の第一歩から、七十年以上の歴史が年代別に書いてある。僕の選んだ本にも謎を解く経過が詳しく書かれていた」
「レプトセファルス誕生の場所や日時を予想して調査している。私の選んだ本も調査結果から予想を立てているところが似ている」

こうした反応は、目的的な読みの力を育てます。

子どもたちの活字離れへの対策として、多くの学校が、読書の時間の確保に力を入れるようになりました。しかし、物語に比べると、まだまだ科学的な読み物への関心は低いようです。科学の分野は日進月歩。魅力的な本が多く出版されています。何よりも、未知に挑む勇氣、謎を解き明かす知的興奮。事実の蓄積が確かな予想・仮説へ、その仮説を立証するための実験・観察・調査・分析、さらにその結果がもたらす新たな疑問や謎……。教科書にある科学読み物を、子どもたちの不思議発見の入り口として大いに活用したいものです。